

『江戸時代の本草書に垣間見える、たぬき・むじな事件の源流』

浅原正和（京都大学霊長類研究所）

時は大正13年（1924年）、「たぬき・むじな事件」と呼ばれる事件が起こりました。「事実の錯誤」に関する判例として大学の教養科目などでよく扱われるため、比較的有名な事件でもあります。どのようなものだったかという、栃木県の猟師が季節により禁猟とされていたタヌキを狩猟してしまったことにより起訴されるのですが、猟師自身は「タヌキ」ではなく「ムジナ」を狩ったと思っていたことにより、一審では有罪となるも、最終審で無罪となった事件です。つまり、猟師は「タヌキ」と「ムジナ」は異なるもので、自分が狩ったタヌキは「ムジナ」と呼ばれる動物だと考えていたわけです。このように、「タヌキ」という言葉が示す動物は必ずしも現代の私たちがタヌキと呼ぶ動物とは限らず、時代や人によって違いがあり、一定ではなかったということがわかります。なかでも、タヌキとアナグマは混同されることが多かったようで、この猟師も「タヌキ」がアナグマを指す語と考えていたようです（夏井，2012）。このような、たぬき・むじな事件でみられた錯誤の源流はいつごろからあったのでしょうか？

現代において動物の分類は西洋の博物学の伝統を受け継ぐ分類学が担っています。一方で、江戸期以前の日本では本草学と呼ばれる学問があり、それによって動物の分類体系が構築されていました。本稿では、これら江戸期の本草書において、「タヌキ」や「ムジナ」は現代で言うどの動物を指す呼び名として使われていたかをふりかえってみようと思います。

まず、江戸時代の本草学の歴史を簡単に振り返ってみたいと思います。江戸時代はヨーロッパで同時期に起きたのと同じように博物趣味が流行した時代で、多くの本草書や博物図譜が作成された時代でした。そのきっかけとなったのは、一つの書物の刊行とされています。それは中国で1596年に発刊された李時珍著『本草綱目』で、中国における本草学の集大成であり、そして博物学的な色彩を多分に帯びた書物でした（西村，1999）。この書物は1604年くらいまでには日本にも輸入され、読まれていたようです（西村，1999）。その後、日本でも独自の本草書や博物書が出版されるようになります。なかでも代表的なものが1709年に刊行された貝原益軒『大和本草』や、1713年刊行の寺島良安『和漢三才図会』、1803から1806年にかけて刊行された小野蘭山『本草綱目啓蒙』です。これらは『本草綱目』を参考に書かれており、『本草綱目』に載っている事物が日本における何に当たるのか、それを比定することに多くの力が割かれてい

ます。またそれに加えて独自の研究を行っていてもいるようで、『本草綱目』にはみられない詳細な記述もみられます。これらの書物は国立国会図書館が画像化しており、オンラインでみることができます。さっそく、「タヌキ」と「ムジナ」が何を指す名前として扱われているかみてみましょう。

※以下、動物の呼び名については「」つきで、現在の動物分類における動物種を指すときは「」なしで記述します。また、以下の書物において動物分類は『本草綱目』にならい、漢字の名前で項目分けされています。今回はそれをどのような日本語の名前（カタカナで記入）に当てているか、そしてその動物をどのように説明しているか（＝現在でいう何の動物に対応しているのか）ということに着目してみていきます。

『大和本草』では

貝原益軒『大和本草』は日本ではじめて独自の研究を行った本格的な本草書と言われています。『大和本草』には「タヌキ」と「ムジナ」の名を持つ動物が特徴とともに書かれています。

「貉」（「ムジナ」）：猫に似る・貉獐獮は同類、うち2つ（貉獐）が本邦に生息

「獬」（「マミ」／「ミタヌキ」）：狸の類・四足の指が5つに分かれている・体が肥え、肉は脂が多く美味

ここで「獬」（「マミ」／「ミタヌキ」）と呼ばれる生き物ですが、5本指であること、美味とされていることからアナグマを指しているのではないかと考えられます（タヌキは4本指に見えるのに対し、アナグマは5本指：米田ほか、1996）。『本草綱目』の「獬」の項目には美味であることは記述されていますが、指の数に関する記述はありません。そのため、指の記述に関してはおそらく独自の研究に基づいているものと思われます。しかし、「貉」（「ムジナ」）に関しては詳細な情報はありません。また、「狸」とよばれる生き物の記述もあります。

「狸」：数種いる

「猫狸」：臭くて食べられない・円頭・尾が大きい

「虎狸」：臭くなく食べられる・尖頭・日本に多い

「九節狸」「香狸」：本邦にあり（そのほか説明無し）

「玉面狸」：尾が牛に似て面が白い？本邦の狸とは別か

これはもともとジャコウネコの仲間を狸と称していたと思われる『本草綱目』の記述を踏襲しているものと思われます。なお、「玉面狸」は「牛尾狸」＝ハクビシンなどではないかと思われます。また、もしかすると「虎狸」はアナグマの情報が混じっているかもしれません。ひとまず、確定できないことは多いですが、『大和本草』の記述から、アナグマを「マミ」、あるいは「ミタヌキ」と呼んでいたとの推測ができます。

『和漢三才図会』では

寺島良安『和漢三才図会』はどちらかといえば百科事典的な性格が強く、『本草綱目』など先行する文献からの引用が多いと言われています。ここにも「狸」、「貉」、「猫」の3種が載っており、以下のように記述されています。

「狸」（「タヌキ」）：数種あり・斑がある・果実を食う、等

「貉」（「ムジナ」）：眠りを好み、人が近づいても目を覚まらず、竹でたたいて目を覚ましてはまたすぐに眠る。あるいは眠りを好むのではなく、それは耳が聞こえないため、人を見れば逃げる。（いわゆる“タヌキ寝入り”をする？）

「猫」（「ミ」）：美味である

これらの記述に関しては『本草綱目』の記述が維持されているだけと考えられるものが多いです。「狸」（「タヌキ」）に関しては斑がある、果実を食う、木に登るのが速いなどの記述があり、『本草綱目』におけるジャコウネコについての記述が維持されていると考えられます（「猫狸」、「虎狸」、「九節狸」、「玉面狸」等記述あり、補足に背中が八字のものを「八文字狸」と称するとある。また、「霊猫（ジャコウネコ）」が狸の類であるとしている）。また、「貉」（「ムジナ」）に関しては寝たふり、いわゆる“タヌキ寝入り”をするとの記述があり、タヌキの特徴として言い伝えられていることに近いように思われます。「猫」（「ミ」）に関しても、美味であるという記述があり、アナグマの特徴に近いと考えられます。これら「貉」や「猫」の特徴に関しては『本草綱目』にもそのまま記述されている内容であり、『大和本草』における「猫」のように独自に特徴を記述した部分がありません。そのため、比定する際にどの程度、独自の研究が行われているかはわかりません。しかし、記述された特徴を意識して比定しているのは確かだと考えられますので、おおむね

「ムジナ」がタヌキを指す語として使われており、「ミ」がアナグマを指す語として使われていたと考えて良いと思われます。

『本草綱目啓蒙』では

一方、その百年後に書かれた小野蘭山『本草綱目啓蒙』ではどうでしょうか。『本草綱目啓蒙』は小野蘭山の講義を弟子が記述したもので、彼のそれ以前の50年余りの間に集められた研究成果がまとめられているようです(西村, 1999)。そこでは「タヌキ」と「ムジナ」がはっきり区別されています。色など見間違えの可能性が高いものや解釈の難しい特徴を除き、わかりやすい特徴を列挙すると以下ようになります。

「貉」（「ムジナ」）：昼は目が見えず、耳も聞こえないため人が近づいても動じず、寝ているように見えるが、実は寝ておらず、もしこれを打てば驚いて走り去る（いわゆる“タヌキ寝入り”をする？）

「猫」（「ミ」／「マミ」／「ミダヌキ」）：狸の類・四足の指が5つに分かれている・体が肥え、肉は脂が多くて美味

ここでも「貉」（「ムジナ」）は寝たふりをすると記述があり、『本草綱目』や『大和本草』にある記述に近いですが、内容が少し異なっており、より“タヌキ寝入り”に近い状況を説明しているように思われます。そして、「猫」（「ミ」／「マミ」／「ミダヌキ」）は『大和本草』と同様、アナグマを指し示しているようです。しかし、「猫」に関しては「首が痩せて長い」など、アナグマとは異なる別の動物の情報が混じっているような記述もあり、また「鼻のあたりが黒く、目のあたりが白い」という、日本産のどの小型食肉類にも該当しない記述もあります。このように複数の動物に関する情報が混ざっている可能性もあるのですが、指の数など、定量的な特徴を考えると、おおむねアナグマを指していると考えて良いと思われます。一方で、「獾」（「アナホリ」）という（足が速いなどの特徴をもつ）特定しがたい動物がありますが、これがのちの「アナグマ」の名につながっていくようです。

一方で、「狸」という動物の記述もあり、これも「タヌキ」と呼ばれています。

「狸」（「タヌキ」）：

「猫狸」：肉に臭気があつて食べられない・マミダヌキと呼ぶが猫をマミと訓ずるのとは別

「虎狸」：肉に臭気が無く薬食に良い

- 「サルデタヌキ」：猿に似た手に蹠（みずかき）がある・木に登る
「八文字」：全身黒色で額に八の字の白斑がある・鍛冶屋のふいごに皮を用いるとき特に勝れるとされる、等

このように「猫」と「狸」が「タヌキ」と呼ばれており、「タヌキ」は比較的広い意味を持った言葉として使われていたようです。

これら動物の名前の関係は複雑で理解するのが難しいのですが、ひとまず「タヌキ」・「ムジナ」の名称とタヌキ・アナグマの関係についてまとめると、1709年刊行の『大和本草』ではアナグマを「マミ」、あるいは「ミタヌキ」と、「タヌキ」の語の派生形として呼んでいたようです（図1）。一方、1713年刊行の『和漢三才図会』ではタヌキを「ムジナ」、アナグマを「ミ」と呼び、またジャコウネコ科の仲間に関する記述に「タヌキ」の語を当てていたようです（図1）。さらに時代が下り、1806年刊行の『本草綱目啓蒙』では、タヌキは「ムジナ」と呼ばれ、アナグマは「マミ」や「ミダヌキ」と呼ばれていたようです（図1）。つまり、1924年に栃木県の猟師が認識していた動物の名前は、1806年の『本草綱目啓蒙』での呼び方に近いものだったのではないかと考えられるわけです。

江戸時代後期の図譜や『Fauna Japonica』について

ここでもう少し時代を下って、江戸時代後期の図譜を見てみますと、1811年に「白狸」、1855年に「狸」と書かれた動物画が描かれています。それらは明らかにタヌキの姿をしており、「狸」（＝『本草綱目啓蒙』によれば「タヌキ」）という呼び名がタヌキを指し示すものとして使われていることがわかります（それぞれ東京国立博物館・博物図譜データベース・画像番号 H0005498『緑？軒動物図』、H0020888『博物館獣譜』）。また、高木春山（？～1852年）の『本草図説』を見ますと、タヌキ（白いタヌキを含む）と考えられる複数の図画に「狸（タヌキ）」との表記がなされています（西尾市岩瀬文庫所蔵）。このように、江戸時代後期の博物図譜では「タヌキ」という単語がタヌキを指し示すものとして使われ出しているようです（図1）。とはいえ、『本草図説』においても「爪が長い」などの特徴が付記されたアナグマのように見える図画に「猫」との表記がなされているほか、『獣類写生』に収録されている、1850年に捕獲されたという「猫（ミダヌキ）」は明らかにアナグマの姿をしており、アナグマに関しては古い呼び方が残っていたようです（西尾市岩瀬文庫所蔵）（図1）。なお、西欧の分類学に日本の動物を紹介する書物となった『Fauna Japonica』（哺乳類に関してはテミンクが分担し、1842年から1844年にかけて刊行）では、タヌキを3種あるとして、「Hatsimon-si」、「Mami-tanuki」、「Tanuki」を挙げて、また「Muzina」を夏毛のタヌキ、「Tanuki」を冬毛のタヌキの呼び名としていま

す（京都大学図書館電子図書館のものを参照）（図1）。一方で、アナグマは日本名「Anakuma」として紹介されています（図1）。この書物のもととなる情報はシーボルトの日本滞在期間である1823から1829年にかけて集められたものですので、記述されているのはそのころの情報と考えてよいでしょう。つまり、19世紀に入って少し経った頃になりますと、現代のように「タヌキ」という名前がタヌキを指すようになっていた（あるいはそう認識する人が多くなっていた）一方、アナグマは未だに「マミ」「ミダヌキ」と呼ばれることもあった、ということのようです。これらの記録には地域的な方言なども影響している可能性もありますが、『本草綱目啓蒙』などそれ以前の書物と比較すると、このような名称の変化が19世紀に入ってから起きたことのように見えます。たぬき・むじな事件においては、明治に入ってから法律がこの新しい呼び方で作られた一方で、栃木県の猟師はそれよりも少し古い呼び方、すなわち、『本草綱目啓蒙』に記されているような呼び方を使っていたために錯誤が生じてしまった…というようなとらえ方ができるかと思えます。

このような呼び方の混乱が生じた理由の一つは、江戸期本草学の分類学としての未成熟さが挙げられるかと思われまます。近代的な西洋の分類学では標本（模式標本）を基準として種を定義します。そのため、命名された名前の指す動物が何であるかは明確であり、また後の時代に命名を検証することもできます。最近もリンネがアジアゾウを記載した際にアフリカゾウの標本を元にしていたことが明らかとなり、リンネの記載の参考となった別の個体が模式標本として指定しなおされるということもありました（Cappellini et al., 2013）。200年以上の時を経て過去の命名の検証が可能なのはモノを保存していたが故です。ところが本草書では説明文があるだけであり、その文章もいくつか異なった動物が混ざり合っている可能性が捨てきれないものです。このようなシステムとしての未成熟さは、本草学が西洋の分類学に取って代わられてしまった理由のひとつではないかと考えられるのです。

補足1：なお現代中国では獾（Huan）はアナグマ類（*Arctonyx* や *Meles*, *Melogale*）を、貉（He）はタヌキを、狸（Li）はジャコウネコ科一般を指す名称として使われているようです（Wozencraft, 2008）。

補足2：タヌキ・アナグマ以外の動物、例えばハクビシン等に関しては今回取り扱いません。

補足3：ジャコウネコ科は本草綱目より靈猫（ジャコウネコ）という言い方もあり（靈狸とも）、江戸後期の図譜ではそのような呼び方をしているものが多いのですが、ここでは触れません。

補足4：地域的な違いについては、川瀬善太郎著『たぬき』（1916年）に渡瀬博士の説として、「ムジナ」が日本古来の名称で、「タヌキ」は中国語の「田狗」から転じて生じたものであるため、中国文学（ママ）の早く輸入された中国地方以西では「ムジナ」と呼ぶ者なく「タヌキ」といい、一方東北地方では「タヌキ」と言わず多くは「ムジナ」と呼ぶ、と記されている。

補足5：なお本稿における推定は、『大和本草』～『本草綱目啓蒙』までは動物に関する生態・行動・形態・味などの説明文から動物種を推定している一方、博物画以降では動物の形態的特徴を元に動物種を推定している点に注意が必要です。ここでは生態や行動などの特徴が本草学者に誤解されていないことを前提としています。

文献

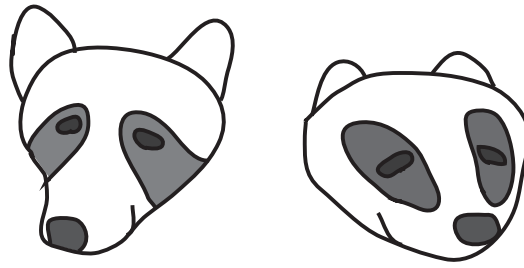
夏井高人（2012）狸貉事件再考 法律論叢 第85巻：327–385.

西村三郎（1999）文明のなかの博物学（上・下） 紀伊國屋書店

米田政明，有本誠，戸田光彦，平田聡子（1996）野生動物調査法ハンドブック
財団法人自然環境研究センター

Cappellini E. et al. (2013) Resolution of the type material of the Asian elephant, *Elephas maximus* Linnaeus, 1758 (Proboscidea, Elephantidae). *Zoological Journal of the Linnean Society* 170: 222–232.

Wozencraft WC. (2008) Order Carnivora. In Smith AT. and Xie Y. eds, *A guide to the mammals of China*, Princeton University Press.



現代の名称	タヌキ <i>(Nyctereutes procyonoides)</i>	アナグマ <i>(Meles anakuma)</i>	ジャコウネコ科?
『大和本草』(1709)		マミ/ミタヌキ	
『和漢三才図会』(1713)	ムジナ	ミ	タヌキ
『本草綱目啓蒙』(1806)	ムジナ	ミ/マミ/ミダヌキ	タヌキ
博物画(1811~1855)	タヌキ	マミ?/ミダヌキ	
『Fauna Japonica』(1844)	タヌキ/ムジナ/マミ	アナクマ	

図1：タヌキとアナグマの呼ばれ方（推定）